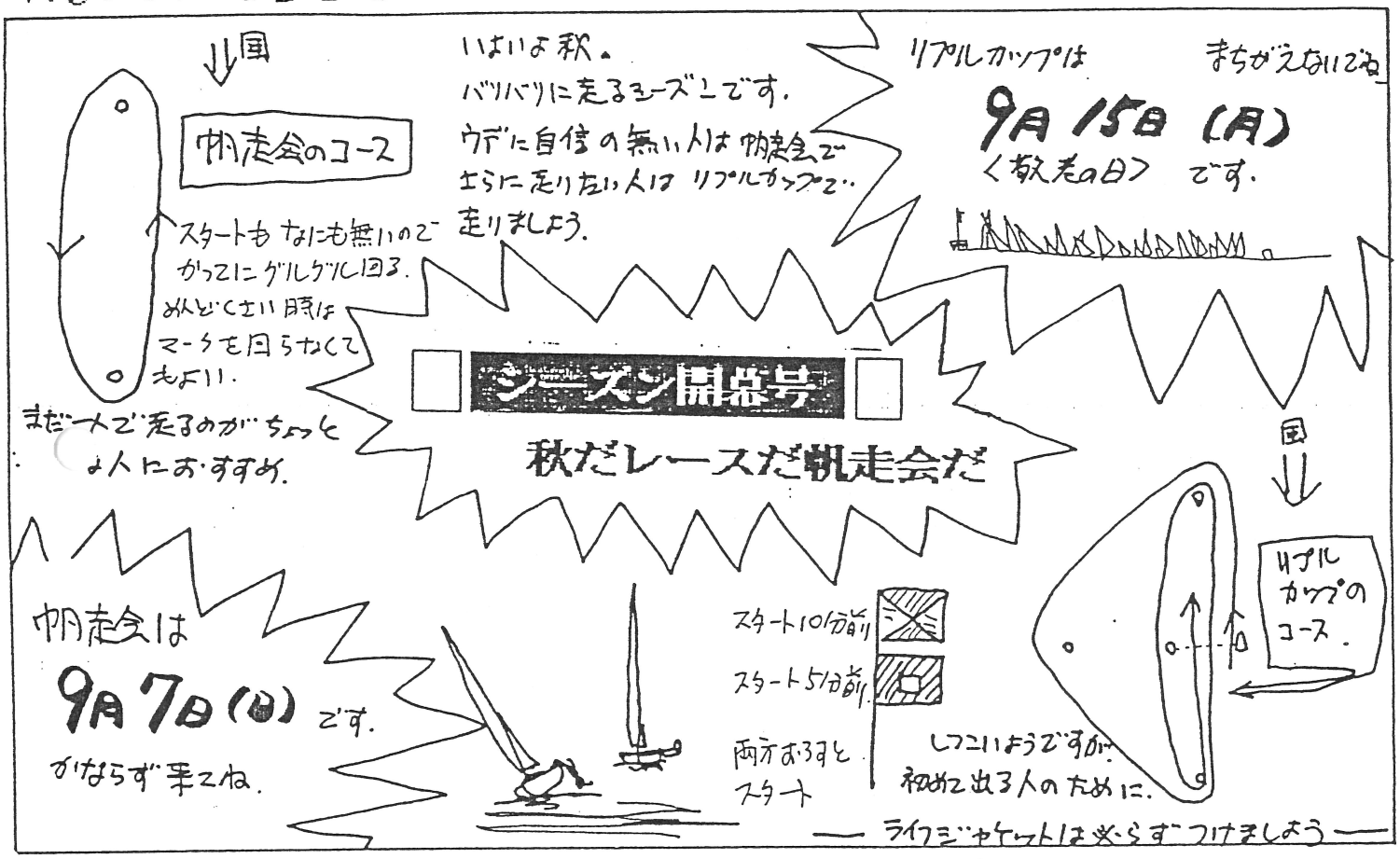
月刊
RIPPLE
RIPPLE SAILING CLUB

発行　¥500
リプル・セイリングクラブ
〒238−03
神奈川県横須賀市長井町長浜3872
☎ 0468−57−1711

No.47 1986.8.15



帆走会の手引

7日の帆走会は、この作戦で行こう。

初心者：まずは単にコースを回る練習。これはカンタン。とは言うものの他にも大勢走っているので、他艇をよけながら走るとなるとなかなか真行が出てくる。上りのコースでは、なるべく多くタックしてコースの中央を走った方が練習になる。

中級者：その1→自分より速い人の後について走り、テクを盗もう。セールの引きぐわい、上り角度等、よーく注意して観察する。

その2→自分と同じくらいの腕前の人を見つけ、並んで走る。たがいにスピードを比べ合おう。この場合、お互いのコミュニケーションがだいじだ。

上級者：もうほとんどレース。なのだが、やはり初心者のめんどうをよく見るいい先輩でいたい。たとえば上りのコースで、初心者と一緒に走り、フリーになったら横に並び、いろいろとアドバイスをするなど、ほほえましいかぎり。基本的にはルールどうり走るわけだが、中には思うようにタック出来ない人もいるので声をかけ合ってよけてあげてほしい。

当日は、いちおう10時から3時までやるが、途中から適当に出てきて、かってに帰ってもOK。

ただし出艇ノートにはちゃんと書いておこう。又、晴れていたりすると、ノドが乾くので、ジュース等を持って行った方がよい。

YSA関東支部選手権 湘南大会
リプル勢上位入賞

7月27日。いよいよ夏本番の長浜沖でヤマハ各クラスの全日本予選とも言うべきYSA関東支部選手権　湘南大会が行われた。集結した湘南地方の強豪連は強風の中、第一レーススタート。風がフレたり、コース短縮になったりと、さんざんであったが、第二レースは風も安定し、素晴らしいレースになった。

リプルの選手達も大活躍し、シーラーククラスでは、小林／杉田チームが準優勝、磯貝／濱来チームが3位。さらに激戦のシーホッパークラスでも、この秋結婚をひかえて、意気消沈？の長谷川選手が4位と好成績を上げた。

この勢いで秋の全日本も頑張ってもらいたいものだが、当日（9月14日）は肝心の長谷川選手の結婚式のため本人はもちろんのこと、シーラーククラスの2チームもパーティー出席のため、全日本出場は断念するみこみであり残念なみこみである。

そんなわけで、次回のリプルカップは9月15日（月）に行われることになったのである。

当日は新婚初夜を終えたばかりのゲッソリした長谷川選手より特別に賞品が出るそうだ。ひきで物のあまりだったりするかもしれないが大いに期待して参加してもらいたい。

ランキングの挑戦もまってるぞ。

鳥羽へ鳥羽へと……草木もなびく

さーて、クルーザーの世界では鳥羽レースと言えば、夏のビッグイベントなのだ。鳥羽をスタートしてシーボニアのフィニッシュ地点まで、１５０マイルを戦うわけなのだが、各艇そのスタート地点鳥羽へ船を廻航しなくちゃなんないわけ。これが又、ちょっとしたクルージング気分で、関東のヨットマン、あるいはヨットウーマン連になかなかの人気なのだ。
で、今年はリブルのメンバーも大勢その廻航に参加したのだ。

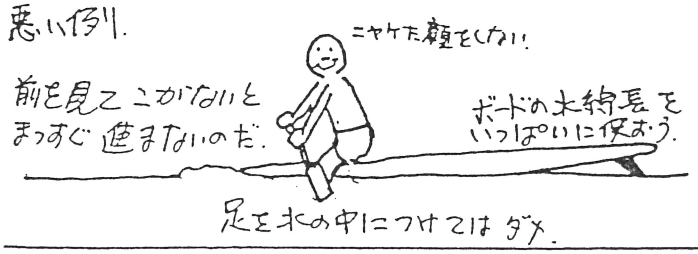
まず、７月１８日からデズニー大久保、相沢、宮下らが、バリバリレーサー“ゼロⅡ”で。
心配されていた台風も足早に駆けぬけ、バツグンの廻航日和の中、下田で寿司など食いながら、のんびり鳥羽へとついたのであった。メデタシ、メデタシ。

つづいて７月２１日。高頴、磯貝の２名はドンクサイクルージングボート“フェルガーナ”で葉山マリーナを出発。と、見ると、逗子マリーナから出て来るのは鮮やかなグリーンに塗られたピカピカの新艇“エレクトロン”。で、よく見ると、なんとあの、チャッキリこと西田宣子が乗っているではないか？！
あぜん、としている高頴、磯貝両名の前をスイスイと追抜いて行まったのであった。

さ、名古屋地方の梅雨あけ宣言はどこえやら。雨や風がザーザービュービュー激しくて、とんだ廻航であった。

バーベキューはこうだった

８月１０日。くそ暑いさなか、バーベキューで楽しんだリブルのめんめんであった。ただブリブリ食っているだけではつまらないので、ウインドサーフィンのボードを使ったカヌー大会を行ったのであった。２人づつのマッチレースで勝った方にはビールの賞品さらにタイムを計り、優勝者にはボードをプレゼントと言うことで各自ハッスル！！
ケッカは？と言うと、やはり、日頃から漕ぎなれている高頴が速く、1’３５で優勝。長老、長崎も軽排水量に物を言わせて３秒差で２位と大健闘。同タイムでパワーの山本もフィニッシュ。大馬力マシーン塩野谷は１秒違いで惜しくも４位。また、よっぱらい山崎はけんとーはずれの方向へつっぱしり、3’０３でビリッであった。
女子の部では“馬力の新人”鈴木が2’３３でみごとに優勝。このての勝負では負け知らずの渡辺は２位に終った。
戦を行う予定であったが、あまりの厚さでとりやめ。賞品のボードは、なんと高頴の手に渡った。

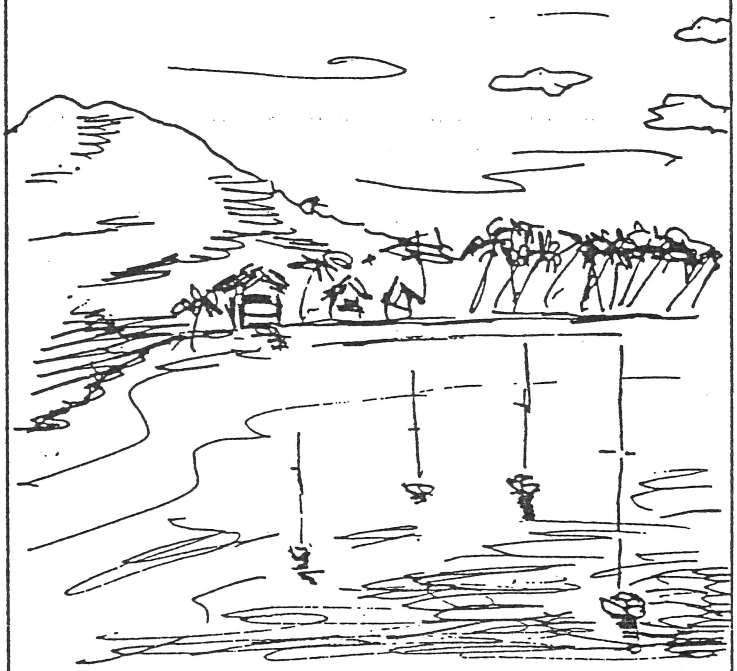


世界のヨットクラブめぐり

－　第４話　　悦楽の島　－

今回ご紹介するボラボラヨットクラブは、いままでのクラブとはちょっと様子が違っておる。

そもそもこのボラボラ島というのはタヒチからヨットで約１日。それはそれは、きれいな珊瑚礁で囲まれた美しい島なのだ。広いラグーン（珊瑚礁で囲まれ湖のようになった海）は波も静かで、その海底には色とりどりのサンゴや貝、魚、等々。　ここにアンカーを打ったヨットは夢のような悦楽の日々が約束される。
もっとも、この島は今では有名な観光の島であり、ビルこそ無いがバンガロー風の、それでいて近代化されたホテルが何個所かあり、それらは自然の中によくとけこんではいるものの、たとえば無人島探険といった要素はほとんど無い。



さてこのボラボラヨットクラブには正式のメンバーというものはいない。このあたりが今まで紹介してきたヨットクラブとは違う所だ。この島にクルージングにやって来た連中の社交の場とも言うべき存在であり、ヨットでここを訪れた者はだれでも会員になれるのだ。もっとも、ヨットでここまで来るには太平洋を渡って来なければならない訳で、そうゆう面では会員の条件はたいへんきびしい。

ボンツーンはテンダーが付けられるだけの小さなもので、その付近はとても浅く、ヨットは各自で勝手に沖にアンカーを打つ俗に言う“ふれまわし”の形になる。そして各自のテンダーを降ろし、このクラブハウスまでやって来ると言うわけ。したがってここでは、しっかりしたアンカーとテンダーは必需品である。

クラブハウスは、ここを切盛りするフランス人一家の住まいにもなっていて、とてもアットホームな雰囲気。バーで勝手に飲物を作り、そなえつけのノートに各自で記入。料金は出港時に成算してくれる。
ディナーの用意もあるが、各艇それぞれ料理を持ちよってのパーティーや、バーベキューのほうが楽しい。また、かつてここを訪れたヨット連が思い々に書き残していったゲストブックをペラペラと眺めているのもおもしろい。我々は３番めにここを訪れた日本艇だった。

その後、このヨットクラブは丸ごと売りに出されたと言うような話も聞いたが、いったいハウマッチ？

〈評価〉
食物　☆☆☆
環境　☆☆☆☆
人情　☆☆☆☆☆